

400年の歴史を誇る「環境にやさしい氷見定置網」を世界に向けて発信

天然のいけすとして名高い富山湾の氷見沖は、日本海側のほぼ中央に位置します。ここでは、春はイワシ、夏はマグロ、冬はブリなど、300種類以上のもの魚が水揚げされています。

なかでもブリは、古くから縁起物として重宝され、氷見では、年末のお歳暮の品として、嫁ぎ先に贈答するなど、慶事にも使用される慣習があります。

氷見の魚のブランドは、これまで定置網技術によって支えられてきました。現在、大小併せて45ヶ統の定置網が氷見沖に敷設されています。定置網技術の発祥は今から約400年も前であると言われており、当時の網は、わらや麻糸を編んでつくられ、竹製の浮きが用いられていました。

定置網は、一網打尽に獲り尽くす漁法であるトロールや巻き網とは異なります。定置網は、仕掛けた網にかかった魚だけを捕獲する、いわゆる待ちの漁法です。網目のサイズを変えることにより、狙う魚の種類やサイズを変えることが可能です。

定置網の周辺には稚魚の群れが取り巻き、ロープや網には多数の貝類が張り付きます。定置網は、イカなどの産卵の場となり、漁礁の役割も果たします。

氷見の漁師さんは、漁港から漁場までわずか数分で到着することができます。すなわち、とても新鮮で、捕獲した魚を生きたまま市場に水揚げすることも可能です。彼らは、水氷(みずごおり)を用いて魚の鮮度を保持する技術を採用し、そうした魚の鮮度は国内でも最高水準と賞賛されています。

2002年、世界定置網サミットが氷見で開催されました。東南アジア漁業開発センター(SEAFDEC シーフデック)は、そのサミットに参加され、その後、氷見市にタイ国での定置網設置に向けての技術協力を要請されました。氷見市は、その要請を受けて、氷見漁業協同組合理事の浜谷忠(はまやただし)さんらを、定置網の技術移転のためにタイ国に派遣しました。(2003年から2年間のシーフデックへの技術協力事業)

その後も、タイ漁業者らの強い要望を受け、氷見市は、2005年よりJICA北陸支部の支援を受け、3年間のJICA草の根技術協力事業を実施してきました。東京海洋大学教授、有元貴文(ありもとたかふみ)さんら学識者も、その事業に加わりました。

浜谷さんらは、毎年2回、タイ国の現地を訪れて指導にあたり、毎年1回、タイ国の漁業者を日本国内(氷見市)に受け入れて、技術訓練を実施してきました。さらに、氷見の漁業者から、タイ国に向けて大型の浮きや中古の網など漁具の寄贈も行われました。

《次頁に続く》

タイ国での技術協力事業は、首都バンコクから車で南東に約 3 時間の場所に位置するラヨン県において、東部海洋漁業開発センター（EMDEC エムデック）が事業の相手方となって実施されてきました。ちょうどこの場所は、20 年前に、シーフデックのアサニー・ムンプラジットさんが日本での JICA 研修に参加された後、定置網の設置を試みた場所でありました。残念ながら、当時のアサニーさんの試みは、成功には至りませんでした。

しかしながら、アサニーさんは、定置網サミットから帰国した後の 2003 年に定置網操業のためのチームを編成し、再度挑戦しました。当初、網の設計が不適當であったことに加え、日々の管理体制が不十分であったため、操業を継続させることは困難でした。彼らは、これらの諸問題に悪戦苦闘しておりました。

そうした状況を打開したのが、氷見市からの計 5 年間にわたる技術協力であり、やがて、タイの漁業者が、日々の漁獲、市場での取引価格ともに高い水準を獲得することにつながりました。

こうして、タイ国における定置網技術協力事業は成功裏に終わりました。漁獲量の増加により、この地域の魚の流通経路に変化が見られるようになりました。定置網で日々捕獲される魚は、より新鮮と好評で、付加価値の向上に伴い、市場でも高値で取り引きされるようになってきました。

こうした定置網技術協力事業は、2007 年から、インドネシアの南スラヴェシにおいても、JICA 草の根技術協力事業の定置網導入に引き継がれております。浜谷さんと有元教授は、「村の、村による、村のため定置網」、「村張り定置網」という目標を掲げ、インドネシアでの事業を立ち上げました。なお、この事業には、日本での定置網技術研修を修了した地元南スラヴェシ、ボネ水産高校卒業生のムハンマド・ザエナルさんや、有元教授の教え子アブドゥー・イブヌー・ハジャールさん（元東京海洋大学留学生）らも協力に加わっております。

（翻訳・編集：氷見市産業部水産漁港課 宮本 英和）